



## ◆経緯

世界の常識知らずして、日本農業の未来はない。



世界の常識とは、グローバル・アグリビジネスにおける農産物の安全に係る第三者認証であり、その最大のシェアを占めるGLOBALG.A.P.認証である。世界130か国18万に及ぶ経営体が認証を受けている。

一方、日本での同認証取得数は約400件、全体の約0.2%である。そもそも日本の農業は、生産工程レベルが高いことや少量、多品種栽培が多く、国内流通に主眼を置いていることから、この第三者認証による安全性の証明は必要がなかった。しかし、急速に進むグローバル化に伴い、未来を担う高校生にはこの世界の常識を教えなければならないと考え、平成27年、GLOBALG.A.P.認証取得の先駆者山野りんご株式会社 山野 豊氏を本校に招き講演会を開催した上で同認証取得に挑戦する有志を全校生徒に募ったところ、15人の生徒が名乗りを上げ、その挑戦が始まった。

ターゲットを「りんご」としたのは、本校が所在する津軽地区において農業教育の拠点校としての役割を果たしていくためには、第一に「りんご」の

世界認証は欠かせないと考えたからである。

## ◆ 生徒によるGLOBALG.A.P.への挑戦

名乗りを上げた15人は、国際認証に関心をもった女子5人を含む1年生と2年生（16歳と17歳）である。彼らは、GLOBALG.A.P.チームとして放課後



や土日に集まり、基準書に出てくる専門用語の解釈から始まり、園地を見回りしては何度も話し合い、リスク管理やデータ化などの整備を進め、本校のりんご販売先約10カ所にトレーサビリティの仕組みを取り入れていった。

審査当日、審査員の質問には全て生徒が回答し、2015年12月、日本の高校で初となるGLOBALG.A.P.認証をりんご園地及び付帯施設で取得した。

平成28年には、「りんご」に加えて「コメ」でもGLOBALG.A.P.認証取得に挑戦し、その審査の様子を地域や広く県内外の生産者、高校・大学関係者、行政関係者等に公開した。公開審査当日、120名を超える見学者は、約8時間に及ぶ審査にGLOBALG.A.P.チームの生徒が全て回答する光景を目の当たりにした。

## ◆ 評価

GLOBALG.A.P.に対する取り組みが高く評価され、オランダ・アムステルダム市で開催された「GLOBALG.A.P.サミット2016」に招待され、パネルディスカッションにパネリストとして参加することとなった。出発前の打合せは一般社団法人GAP普及推進機構・GLOBALG.A.P.協議会の今瀧博文氏のコーディネートにより、ドイツ、アメリカ、エジプト、そして、本校を結ぶスカイプで行った。

現地のパネルディスカッションは、「GAP文化の形成」がテーマで、本校生徒と私が英語で取組を紹介するとともに討論に参加した。各国の代表がいかに労働者一人一人に規範意識をもたせるかについて意見が飛び交った。これは、「人づくり」「教育」そのものだと実感した。また、サミットの総括であるクロージン



グセッションでは、本校生徒が代表4人のスピーカーの一人に選ばれ、約600人の各国代表に自分の農業に対する夢を語った。更に、「G.A.P. Awards 2016」を高校では世界初受賞した。また、かつて美空ひばりも受賞した「青森りんご勲章」も手にした。

## ◆ GLOBALG.A.P.を教育システムへ

GLOBALG.A.P.を学んだ生徒たちの成長ぶりに確信をもち、本校では平成28年度からGLOBALG.A.P.教育を、全学科の生徒が学ぶ科目「農業と環境」で教育課程に組み込むこととした。これにより、本校は世界規準で日本の農業を牽引しうる卒業生約170名を毎年送り出すことが可能になった。

また、現在、NEC日本電気株式会社と連携し、認証取得を支援する教育プログラムの共同開発に取り組んでいる。これにより、学習者と指導者双方に、都市部であれ、山間部であれ、場所を選ばずに個に合わせた質の高いGLOBALG.A.P.教育が提供できる。ITが生活の一部になっている生徒が楽しみながらGLOBALG.A.P.について学ぶことができると考えている。

## ◆ 本校産りんご「ふじ」を中国へ

GLOBALG.A.P.認証が世界のマーケットへのパスポートであるなら、壁に飾っておくのではなく実際に使わせたい。この思いから、JETRO青森、株式会社DRAGON AGENCY、NEC日本電気株式会社、山野りんご株式会社を学校に招き、輸出方法について研修するとともに、実際に本校生徒が手続きをし、本校が輸出業者となり、本校産「ふじ」りんごを中国に輸出し、四川省成都市の伊藤洋華堂で販売実習を行った。これは、伊藤洋華堂中国総代表、現イトーヨーカ堂代表取締役社長 三枝 富博 氏が本事業の趣旨に感動してく



ださり実現したものである。特に、成都市に現地法人をもつ株式会社DRAGON AGENCYのアドバイスのもと、現地の文化、ライフスタイルの理解に基づくマーケティングをし、販売価格や販売方法を生徒が考え、青森中央学院大学の協力を得て中国語の研修を受

けたのち、平成29年1月18日から22日までの日程で渡航し、販売実習では、1個23元（約410円）と設定し、目標600個のところ650個完

売した。

当初、打合せ段階では、現地のバイヤーは「値段が高すぎて売れない」との見解だった。しかし、売り場で何回も作戦を練り直し、客層に合わせてマーケティングを繰り返した。練習した中国語があまりに上手すぎて「日本人じゃないでしょ、このりんごも日本のものじゃないでしょ」と言われ、日本語をメインに話しかけるようにしたり、空輸に使った発泡スチロールの箱をわざとディスプレイしてライブ感を出し、本物をアピールした。また、「日本のものは放射能が怖いから買わない」というコメントには、わざと、皮付きで試食を出し、皮まで食べられる安全性をアピールした。更に、富裕層が増えるにつれ、バラ売りから6個入り化粧箱セットに詰め替えたところ、飛ぶように売れた。1箱約2,460円のりんごを値段も聞かずに11箱注文する人もいた。しかし、成果は、準備から10時間足らずで650個を完売したことではない。このように、その都度、生徒が課題を的確に捉えて、議論し、それに仮説を立てて実証して課題解決していったことにある。

## ◆ GLOBALG.A.P.の教育効果

「GLOBALG.A.P.サミット2016」でテーマの一つとなった「GAP文化の形成」とは、農業への規範意識は農業法人の社長だけがもっていても意味がなく、農業に従事する作業員一人一人の心の中にGAPに関する規範意識をいかに育てるかということである。農業に関わる全員が農産物、労働者、環境等に対する安全への規範意識をもって初めて持続可能な農業になっていく。そして、世界中がこれを目指すことによって更に農業が成長する。

分科会に出てみて、これは人づくりに他ならない。GLOBALG.A.P.は単なる審査、認証ではない。農業人としての生き方に関わる倫理観であると思った。本校生徒のりんご農家を営む父親が言った。「うちの息子は変わった。GLOBALG.A.P.を学ぶ前は、力仕事の手伝いだった。しかし、GLOBALG.A.P.を学んでからは一生産者として議論ができるようになった」それもそのはずである。国際認証審査に実際に対応し、認証を取得できる人間に成長したのだから。将来の方向性も固まる。農家の生徒はGLOBALG.A.P.を実家に取り入れて農業法人を大きくすると決心し、農家以外の生徒も、大手市場のバイヤーや農業行政を目指し、GLOBALG.A.P.を自分の人生に生かそうとする。農業高校には多様な教育活動があるが、ここまで人づくりに効果のある取り組みは見たことがない。

なぜか。それは、審査を体験すればよくわかる。落とすための審査ではない。まず、人間関係をつくる。「隠し事をさせない、ウソをつかせない人間

関係」を構築する。そして、一緒に課題を明確にする。審査の質問の意図を解説する。世界規準が自分の園地まで来てくれて、まるで研修をしているかのような。だから8時間かかる。審査員に、「高校生



だからこんなに丁寧に教えてくれるんですか」と聞くと、「いいえ、これがGLOBALG.A.P.の精神です」との答えが返ってきた。結果として、私達が世に送り出したい理想型の生徒が目の前に現れることとなった。平成29年度は、リンゴ、コメに加えて、メロンでも同認証取得に生徒が挑戦した。9月13日、14日の1日半にわたり認証審査を受け、全国から来校した140人に公開した。

## ◆ 今後の取組目標

青森県では、この5年間で農家数が9200戸減少した。また、農業高校でありながら実家が農家である生徒は全体の2割程度である。しかも、祖父母は農業を営んでいるが父母は農業以外のサラリーマンという例も含めてである。さらに、ほとんどの祖父母は「農業は苦労ばかりで儲からないからやるな」と孫に語っている。

この状況を打破し、地域や日本の農業を活性化させ、若い世代が自信をもって農業を選択し、農業人として豊かな人生を送っていくために高校教育が担う責務は、単においしい農作物の作り方を教えることではない。

本校がGLOBALG.A.P.を教育の柱に据えてからは、進路志望に逆転現象が起きた。GLOBALG.A.P.教育導入以前は、65%が農業関連以外の産業を志望していたが、以後は65%が農業関連産業への進路を志望している。

さらに、一層、農業関連産業のパーセンテージを伸ばすために、次の4点を目指す。

### 1 3年生を高校生コンサルに

審査対応は1, 2年生で十分対応できることがわかった。そこで、日々のGLOBALG.A.P.チームの取組はこれまでと同じだが、3年生は審査対応で

はなく、プロの生産者に呼びかけ、GLOBALG.A.P.取得を希望した農家をチームでコンサルとして支援する。これが成功すれば、一層、生徒の知識と経験が磨かれるとともに、全国306校の農業高校が拠点となって高額なコンサル料なしに地域にGLOBALG.A.P.を普及できることとなる。

## 2 圃場の作物すべてでGLOBALG.A.P.認証を

GLOBALG.A.P.の審査は、その作物の第1回目の審査のときだけ日程が調整できる。収穫作業も見せなければならないからだ。2年目からは抜き打ち検査になるので、毎年、新しい品目に挑戦することで審査の日程を予め決めて、公開審査を実施する。そして、すべての作物で認証を目指し、敷地内全てを国際基準にすることで生徒、職員の意識が持続的に高く続いていく。また、これにより、地域のみならず広く全国への啓蒙活動にもなる。

## 3 輸出拡大と農業ビジネス教育の強化を

現在継続している中国への輸出販売研修は、多くの日本企業が参入する沿岸部ではなく、日本からの輸出ルートが確立されていない内陸部をターゲットとした。りんごが本当に現地に届くのかという不安やリスクも多かったが、ありのままのグローバル社会を学ぶことができ、生徒及び教員にとって最高の学びの場となった。今後は、輸出国を拡大し、国による輸出入の文化の違いを学び、よりグローバルな輸出経験をさせる。また、近い将来、大きなビジネスとなるであろう越境Eコマース、さらに、ビジネスに対応できるマーケティングや原価管理等経営力を身に付けさせる。ネット授業をフルに活用し、日商簿記3級取得を目指した簿記教育を強化する。

## 4 GOC(五農オリンピック委員会)を設置へ

2020年のオリンピック・パラリンピックは、持続可能性やGAPの意義、農産物のロジスティクス等生徒にとって絶好の学習チャンスである。生徒が調べ、企画してGLOBALG.A.P.認証食材及びFSC認証木材を生徒の手で五輪に届けさせたい。よって、GOCを設置し、生徒達が提供の条件や方法、数量等を企画していくこととする。

※ 事項以降に資料編があります。

## 【資料編】これまでの GLOBALG.A.P. 認証取得へ向けた動き・イベント等

### 平成 27 年度

- 8 月 GLOBALG.A.P. チーム結成
  - ・ 夏季休業中は実習日に合わせて学習会
  - ・ 2 学期に入ってから、放課後と土日に学習会
  - ・ 認証取得生産者による学習会の実施（8 月から 10 月、計 3 回）
- 9 月 チェックリストに基づく自己点検  
(9 月中旬から 11 月上旬、毎週 2 回)
- 10 月 審査申込み（「青果物（リンゴ）」10 月）
- 11 月 審査（本校にて約 8 時間）
- 12 月 GLOBALG.A.P. 認証（12 月 22 日）

### 平成 28 年度

- 6 月 県外の GLOBALG.A.P. 認証団体・生産者 視察  
(山形県・コンバイン作物（米）)
- 7 月 審査に向けた準備、審査申込み  
(「青果物（リンゴ）」「コンバイン作物（米）」)
- 8 月 公開審査の報道記者発表、審査に向けた準備（毎週 2 回）
- 9 月 公開審査（本校にて約 8 時間）  
GLOBALG.A.P. サミットへの参加  
(G.A.P. Awards 2016 受賞、本校生徒による事例発表とパネルディスカッション参加、クロージングセッションでの発表・オランダ王国アムステルダム市)
- 11 月 「平成 28 年度青森りんご勲章」受賞
- 1 月 りんご海外輸出販売研修（中国四川省成都市）

### 平成 29 年度

- 5 月 12 日 「GLOBALG.A.P. への挑戦 2017」と題して、チームへのオリエンテーションや生徒の取組を公開
- 8 月 31 日 弘前大学 GAP 相談所所長による模擬審査を公開
- 9 月 13 日、14 日 本審査を公開
- 10 月 12 日、13 日 国際的な森林認証 FSC 審査
- 11 月 17 日 『五農米 空を飛ぶ』ANA・東洋ライス・五農高 三者合同発表会開催（五農米 ANA 国際線ファーストクラス機内食で提供）
- 12 月 6 日 GLOBALG.A.P. 認証取得（リンゴ・コメ・メロン）

- 12月14日 北海道岩見沢農業高等学校と GLOBALG.A.P.教育に関する連携で協定締結
- 1月29日(30年)国際的な森林認証 FSC 取得（高校生による取得は世界初）
- 1月31日 GOC 五農オリンピック委員会立ち上げ記念講演  
講師：東京オリ・パラ組織委員会総務局持続可能性部長 田中丈夫 氏
- 2月2日～6日(30年)りんご海外輸出販売研修(中国四川省成都市)  
※柏木農業高等学校、弘前実業高等学校、同藤崎校舎と合同で実施
- 2月14日五農米「味しらべ」(岩塚製菓) 発売セレモニー
- 2月20日小泉進次郎、木村次郎両衆議院議員とともに FSC 取得について  
齋藤農林水産大臣表敬訪問
- 2月22日～26日(30年)香港りんご販売研修(中国香港特別行政区)  
※北海道岩見沢農業等学校と合同で実施
- 3月1日農水省「未来につながる持続可能な農業推進コンクールの GAP 部門人材育成の部「生産局長賞」受賞